

オリニ主日
説 教

子どもの主日メッセージ

<マルコによる福音書10:13~15>

金 迅 野 牧師（信徒委員長／横須賀教会）



1. 教会に幼い子どもたちの声が響きわたるとき、あるいは礼拝のなかで子どもたちの祝福をおこない皆で祈るとき、その時間がゆるされたことに深い恵みを感じます。また、礼拝時におとなたちの「アーメン」の声にあわせて、大きな声で「アーメン」ととなる子どもの声が聞こえてくると、心の奥底から温かいものが湧き上がるのを感じます。それは文字通り、その声の「かけがえのなさ」のようなものを感じる瞬間です。

2. 耳に入ってくる「戦争」のニュースに接しながら、私たちは、そのような「かけがえのなさ」が、大きな暴力や力を行使しようとする人たちの宣伝文句のような大きな声によって木っ端微塵にかき消されてしまうことの経験を日々重ねているかもしれません。「どちらの側につくのか」、「どちらが正しいのか」という理屈をとうとう述べることに汲々としきり、気がつくと私たちは、ひとり荷物を引きずりながらなきじやくっている子どもの姿がどんどん後景に追いやられるような時代を生きているかもしれません。負傷者や死者の数、暴力をふるうものの残忍さを訴える声、あまたの苦悩にゆがむ人々の顔を、画面を通して見聞きするうちに、私たちは状況を分析する「記号」に飲み込まれ、知らず知らずのうちに、傷つき痛みを負っている存在の「声」を深く受け取ることや、そのような「声/ことば」の「かけがえのなさ」から遠ざかってしまっているかもしれません。

たとえば、1923年の関東大震災で虐殺された朝鮮人の数が、官報(578人)、吉野作造の調査(2613人)、YMCA留学生たちの調査(6661人)の間で大きくかけはなれたものになったことにも、「かけがえのなさ」をめぐる人間の在りようの違いが埋め込まれているかもしれません。現代において、親の暴力でいのちを落とす子どもの泣き声や、コロナ禍でギリギリの生活をしながら奨学金で子どもを学校に送っている親の「もうおわりだと感じてしまします……」「弱者は生きていってはだめなのでしょうか……」という声(2021年におこなわれた「あしなが基金」のアンケートに記された声)にひそむ深い絶望が人々の心にそれほど響かなくなっているとしたら、そしてこの親たちに自らを「役に立たない」と思い込ませるような社会が成り立つてるとしたら、このように人間の尊厳の「かけがえのなさ」が損なわれる時代にこそ、私たちは、イエスの身振りを想い起こす必要があります。

3. 「イエスに触れていただくために」連れられてきた子

どもたちがどのような背景をもっていたのか、聖書は明らかにしていません。しかし、「触れていただくため」という事情のなかに、子どもとおとなが抱っていた苦悩を読み取ることができるようになります。ところが、子どもとともにイエスに近づこうとする人々を弟子たちは叱りました。上から目線で叱る弟子たちの身振りに、偉さ、権威、力などに対する弟子たちの勘違いが認められます。「いちばん偉い者」をめぐるエピソード(マルコ9:33~37)にもすでにそのことが現っていました。「メシア」をこの世の権力と勘違いしていた弟子たちは、イエスに近づこうとする子どもとおとなを、イスラエルの王に対して「頭(ず)がたか高い」と思ったのかもしれません。

歴史学者によれば、近代以前の社会は子どもを、「一人前ではない」「役に立たない」「価値が低い」そういう存在として見なしていたといいます。弟子たちの目線もそのようなものだったのではないでしょうか。しかし、そのような弟子たちの姿勢、当時としてはある意味で当たり前であった態度に、イエスは憤ったのでした。イエスのこの憤りこそ、その後に続く「神の国はこのような者たちのものである」という言葉に一直線でつながっていました。イエスが語る「神の国」は、この世の権力が思い描く体制とはまったく別の人間の関係性を示すものでした。それはこの世の周縁に置かれた人々をむしろ「真ん中」(マルコ9:36、マタイ18:2など)に招くような、人間が思う中心と周縁の思い込みを逆転させる構想でした。

4. 「一人前でない」「役に立たない」とみなされ、あるいは自らをそのようにみなすように追い込まれ社会の周縁に追いやられた人々。イエスはそのような存在を、「神の国」の「かけがえのない」主人公として眼差し「真ん中」にいるべき存在とみなしました。私たちは、自分がそのような存在になりますと同時に、弟子たちのようにそのような存在をはねつける存在にもなりえます。自分のことが「役に立たない」存在と思えるとき、イエスが「真ん中」に招いていることを信じたいと思います。自分がそういう存在の傍らにいるとき、そのような存在を「真ん中」に招くことができているか自問できる私たちでありたいと思います。この「戦争」の時代に、ときにイエスを信じて絶望から抜け出し、ときに自分自身の傲慢さを自問しながら、人間の「かけがえのなさ」に向かって身体ごと近づいて行ったイエスの身振りを想い起こし、「神の国」が求める人と人の関係のあり方をこの世に現すことに向けて歩みだす私たちでありたいと思います。

韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。
●B6版変型・1483ページ
●価格:2,500円(消費税・送料込み)
※お求めは総会事務所へ

講壇掛・ストール販売



在日大韓基督教会ではKCCJのロゴ入り講壇掛・ストールを制作・販売しています。
価格は講壇掛・ストール共4色セットで各1万円(約半額)
講壇掛・ストール両方ご購入の場合は1万5千円です。※お求めは総会事務所へ

第73回定期総会を開催

金清坤牧師の宣教師加入式も行う

2022年5月3日、在日本韓国YMCA 9Fホールにて、総代103名中、78名が参加して、第73回関東地方会定期総会が開催された。

開会礼拝は申大永長老の司会により李明忠会長が「教会の命」(ヨハネによる福音書14:6)と題してメッセージを伝えた。

議事では各種報告が行われた後、各教会の長老請願が承認された(西新井1名、東京東部2名、品川1名、川崎1名、横浜3名)。コロナ禍をはじめさまざまな困難に耐えながら宣教の灯火をともしてきた大宮教会、日立教会が閉鎖に追い込まれてしまったことを深い悲しみをもって受け止めた。

新年度予算は10,028,000円(内6,588,000円は総会分担金)が承認された。

建議案審議終了後、今回期に定年を迎える洪性完牧師、李省長老が挨拶した後、地方会長老会からお二人に花束を贈呈し感謝の意を表した。

また、金聖泰牧師が、青年活動の活性化と信徒のつながりを強めるための総会信徒委員会の活動への協力をアピールした。

閉会礼拝では金清坤牧師の宣教師加入式が執り行われた。



第59回定期総会を開催

李成俊牧師按手式も行う

2022年5月3日、名古屋教会にて中部地方会第59回定期総会が開催された。

開会礼拝は、副会長金勝正長老の司会で行われ、地方会長金明均牧師が「嘆きの原因」(エレミヤ8:18~22)という題で説教された後、崔和植牧師の司式のもと聖餐式が執り行われ、名古屋教会の李成俊牧師按手式が行われた。

会議には総代員26名中24名が出席し、総会長の中江洋一牧師の挨拶があり、総会信徒委員長である梁陽日長老が活動に対するアピールを行った。

各種報告の後、名古屋教会の長老2名増員請願、岐阜教会の宣教費補助請願、朴太元牧師と金智一牧師の無任所牧師延長の請願が承認され、14,050,927円の2022年度の予算案が承認された。



福音新聞7月号休刊のお知らせ

都合により2022年7月号の福音新聞は休刊いたします。

第73回定期総会を開催

3名もの伝道師が誕生し、主に感謝

2022年5月5日(木)、2年ぶりとなる対面での定期総会が、大阪教会にて総代73名中63(委任2)名の出席で開催された。

開会礼拝では副会長裴良一長老の司会のもと、会長代行朴栄子牧師の「一つの群れになる」(ヨハネ10:16)という説教を聞いた後、鄭然元牧師の司式により聖餐式が行われた。

続いて伝道師認証式が執り行われ、鄭詩温(大阪)、高大韓(京都)、韓宣榮(大阪)の3名もの伝道師が誕生したことを一同で主に感謝した。また、地方会副会長を務めて引退された俞正根・金道栄・金成元長老に功労牌を贈呈して労をねぎらった。

主な決議事項は、各教会の長老増員請願の承認、京都東山教会の「京都シオン教会」への名称変更の承認、新年度予算案の承認などである。

さらに、3つの事柄に関連する関西地方会規則改正案が承認された。その内容は、①災害時のオンライン決議を承認することなど、会議の措置に関するもの(第2章定期総会、第6章任職員会)、②部署・部員に関するもの(第7章)、③教会移転に関するもの(第4章)である。



第38回定期総会を開催

会長辞任により韓承哲副会長が代行

2022年4月29日、神戸教会にて第38回西部地方会定期総会が開催された。コロナ禍の影響で一部Zoomによるリモート出席を認めたうえで、対面により行われた。

開会礼拝は、地方会長の梁榮友牧師の「祝福の者」(創世記12:1~3)という題の説教後、ウクライナ難民のため席上献金を捧げた(42,000円)。全総代31名中20名(リモート出席含む)の出席で開会された。

書記によって召天者の名簿が読み上げられ、崔亨喆牧師が代表の祈りを捧げた。続いて中江洋一総会長の挨拶があった。

今回はコロナ禍により、他の来賓に関しては、挨拶文を報告書に載せ挨拶の代わりにした。

主な決議事項は、2021年度決算・2022年度予算案(9,019,835円)、会長辞任による韓承哲副会長が会長代行への就任、臨時堂会長の選任に関する各献議案について承認がなされた。次回定期総会の日程と会場選定は任職員会に委任することとし、定期総会を終了した。



第72回定期総会を開催 曹恩注伝道師認挙式も行う

4月29日、福岡教会にて第72回西南地方会定期総会が行われた。総代22名中18名の出席（内オンライン2名）であった。開会礼拝では曹恩注伝道師（宇部教会）認挙式を執り行った。そして主要報告には、対馬めぐみ伝道所の礼拝堂献堂のための土地購入が上げられた。西南地方会はこれらの課題にも共に歩み合える福音の希望が与えられた。

決議は、(1) 西南地方会規則改正案の承認。(2) 長老請願（小倉1名・福岡2名・博多2名）を承認。(3) 今年度の予算案（9,596,322円）を審議し承認した。

最後に、連帯する日本基督教団九州教区（日下部遺志議長・西岡裕芳副議長）と、日本キリスト教会九州中会（澤正幸書記、黄南徳東アジア平和センター主事）より挨拶を受け、交りを持てた。



総会第1回常任委員会開く オンラインで行い、常任委員21名が参席

第56回総会期第1回常任委員会が、2022年4月24日、Zoomによるオンライン会議で開催され、常任委員23名の中、21名、特別委員長2名が参加して各種報告や案件審議などが行われた。

審議され、決議された主な献議案は以下である。

- (1) 第56回関西地方会の会議録承認の件は、修正、訂正事項があつたら提出してもらい、次回の常任委員会にて確認し、第57回定期総会に提出する。
- (2) 「麦仁道基金」に関する件は、任員会が具体的に検討し、次回の常任委員会に提案する。
- (3) 「在日大韓基督教会社会福祉連盟」解散の件は、長期間活動していないことで、任員会において検討・継続審議する。
- (4) 「難キ連（難民・移住労働者問題キリスト教連絡会：NCCJ）からKCCJ全国教会へアンケート調査協力依頼（「外国籍・外国にルーツを持つ方に関するアンケートご協力のお願い」）の件を承認。
- (5) 「関西地方会の規則改正」の件は、憲法委員会へ回付、次回の定期総会に上程。
- (6) 「救済基金規則改正」の件は、改正案を憲法委員会に回付、次回の定期総会へ正式に上程。
- (7) 信託委員会「予算増額」要請の件は、現実的には財政的に厳しいので、必要経費においては今後総幹事と相談の上で進めていく。
- (8) 次回の常任委員会は2022年10月10日（月/休）11:00、KCC（大阪）で対面のみで行う。

＜2022年才モニ主日献金＞(2022年5月23日現在)

三沢教会	15,000円	小倉教会	25,000円
沖縄教会	10,000円	横須賀教会	13,000円
長野教会	5,000円	横浜教会	20,000円
大阪築港教会	5,000円	豊橋教会	28,000円
福岡中央教会	6,000円	大阪教会	173,070円
堺教会	18,000円	折尾教会	5,000円
品川教会	5,000円	東京教会	30,000円
名古屋教会	65,600円	博多教会	2,000円
武庫川教会	20,000円	京都教会	30,000円
浪速教会	5,000円		
東京中央教会	17,000円	合計	497,670円

春の音楽伝道集会開催 新礼拝堂にトロンボーン奏者招く



2022年5月15日（主）午後2時に神戸教会において、トロンボーン奏者の亀井玲司氏とピアノ伴奏の高橋玲子氏を招いて、西部地方会壮年会共催による春の音楽伝道集会が開催された。

神戸教会では例年春季に讃美や音楽による伝道集会が開かれていたが、新型コロナ感染蔓延のため2020年以後中止が続いているので3年ぶりの、しかも新礼拝堂では初めての音楽集会である。亀井氏は地元神戸市兵庫区出身のクリスチャン。

交通事故で楽器を握ることも吹くこともできなくなる苦難と絶望の底から主の恵みによって引き上げられ、奇跡的に回復したという証があった。今では国内外で福音伝道のため年間約150回のコンサートに出演し、数々の賞も受賞している。7mを超える天井の新礼拝堂で、讃美のために造られた神の楽器と称せられるトロンボーンの優雅できめ細やかな音が響き渡った。韓世一牧師のショートメッセージを挟んで讃美歌など全10曲が演奏された。演奏者と参加者が一体となって神を賛美する素晴らしい伝道集会であった。（報告者：尹聖哲長老）

鄭守煥牧師委任式挙行 新居浜グレース教会に5代目牧師赴任



去る5月5日、西部地方会の新居浜グレース教会で、鄭守煥牧師の委任式が行われ、コロナ禍の中、西部地方会の各教会をはじめ、日本基督教団四国教区および近隣の日本の教会から多くの方が参席した。

礼拝は臨時堂会長中江洋一牧師の司会のもとで開会され、説教は梁栄友牧師（武庫川教会）が「共に働く牧会者」（マルコ3：13～15）という題名でされた。

委任式は、西部地方会長代理の韓承哲牧師の司式で行い、紹介、誓約、祈祷後に鄭守煥牧師が新居浜グレース教会の担任牧師であることが宣布された。

この度、委任された鄭守煥牧師は、1964年日本で生まれ、長崎総合科学大学、神戸改革神学校を卒業し、韓国やカナダで語学研修したのち2003年西南地方会で牧師按手を受けた。折尾教会、豊橋教会を牧会した後、この度四国の新居浜グレース教会に赴任した。

金信煥名誉牧師が召天 在日2世牧師として韓国政府からも勲章授与



第38回総会期（1985年～1987年）の総会長として歴任した広島教会の金信煥名誉牧師が、去る2022年5月16日に天に召され、36年間牧会した広島教会で葬儀が行われた。享年90歳であった。

故・金信煥牧師は、1932年、愛知県豊橋市で在日2世として生まれ、同志社大学神学部、大学院を卒業し、1960年牧師按手を受け、大阪築港教会での牧会を経て1966年広島教会に赴任、2002年隠退まで牧会した。

韓国の延世大学校連合神学大学院やカナダのノックス神学大学院で神学研修などをし、広島民団「韓国学園」での活動、また韓国の被爆者を広島の病院へ招く活動に力を入れた。その故、韓国政府から「民族教育及び韓国人被爆者支援活動」などの功績により「木蓮章」、「無窮花章」等の大統領勲章が授与された。

公開講演 連載4

KCCJ・CCJ宣教協力委員会の公開講演会(2021年12月9日)

和解の主にいざなわれ、罪責をになって(4)

吉高 叶 牧師(日本NCC議長／日本バプテスト連盟市川八幡キリスト教会牧師)

3. 「平和のいましめ」を心に刻む

(4) 歴史のいましめを破る自民党改憲案

自民党改憲草案を皆さまはすでにご存じでしょう。自民党はこの改憲草案で、もう何度も選挙を戦い、安倍内閣以降は、全勝しています。自民党からすれば、改憲案はすでにできているのです。

この改憲草案の特徴と思想を確認しておくと、①前文：日本固有の歴史と文化、天皇を戴く国家、②天皇の元首化（「神の国」の位置づけ）、③国旗・国歌への尊重義務（天皇の讃美）、④元号の明文化（天皇の時間支配）⑤自衛権と自衛軍の明記、集団的自衛権の行使、⑥選挙権は日本国籍のみ（臣民の國）、⑦人権の制限、公益と秩序の優先（臣民のつとめ）、⑧政教分離原則の緩和、神道儀礼を社会儀礼として生活化、⑨家族の尊重（“良い”家族像の復活）、⑩緊急事態規程の新設、⑪憲法改正の要件の緩和：過半数による発議→有効投票の過半数による国民投票、⑫国民の憲法尊重義務、⑬人権に関する根本的規定を全面削除。

すなわち自民党改憲草案は、次のようにすべて「再定義」をしようとしています。

- ・宗教的独自性を持たせて「国家」を再定義。
- ・宗教的権威による政府（国家）のもとで「国民」を再定義。
- ・国益のもとで「人権」を再定義し、国益のもとで「戦争」を再定義。

現在の憲法の基本的な立場は「戦争はしてはならないもの」ですが、自民党改憲案によれば「しても良い戦争」や「しなければならない戦争はある」ということになり、現憲法の三原則と「近代立憲主義」の完全破壊なのです。

私には、今でも忘れられない出来事があります。それは私が以前牧師をしていた千葉県松戸市の栗ヶ沢バプテスト教会のすぐそばにある麗澤大学のキャンパスで2007年6月30日、当時の久間章生防衛大臣がおこなった発言です。「米国は、ソ連が日本を占領しないよう原爆を長崎に落とした。悲惨な目にあったが、あれで戦争が終わったという頭の整理で、いまは『しょうがない』と思っている」。

長崎選出の衆院議員であるにもかかわらずこのような発言をしたということで、広島・長崎の被爆者団体から抗議が巻き起こり、まもなく久間さんは大臣を辞任されました。しかし、この発言の恐ろしさは、「〇〇のために死んでも仕方がない命がある」と語ったことです。

靖国神社の問題に目を向けると、「国のために死ぬ」ことを國家が意味づけ、価値付けをする「英靈思想」であり「靖国の思想」なのです。私たちが「反ヤスクニ」「信教の自由」「政教分離」を守る闘いを続ける理由は、「神ならぬものにひれ伏してはならない」という主告白の問題だけではなく、「しても良い戦争があるという思想」「死んでも仕方のない命、死んでも良い命があるという思想」「人間が、人の生と死の意味づけをしようとする思想」と闘わねばならないからです。

自民党改憲草案の狙いは、天皇制の持つ宗教的機能をしっかりと意識し、国民の生命の意味を再定義しようとしています。ですから、どんなに天皇制がソフトな装いをしたとしても、この本質を持つ限り、私たちは天皇制と闘わねばならないのです。

4. 「天皇代替わり」に見る危険性

2016年8月8日の天皇 TV メッセージ「象徴としてのつとめについてのことば」から始まって、2020年11月8日の「立皇嗣の礼」に至る天皇代替わり、「明仁（あきひと）天皇」から「徳仁（なるひと）天皇」への交代という出来事には、明仁天皇が在位したそれまでの30年間におこなった「象徴」としての行為

と、それが日本社会にもたらしたものが強く反映されています。そしてこの30年間は、日本の教会にとってもまた、重大な影響をもたらせました。

明仁天皇即位（1989年）以降、天皇の公的行為は飛躍的に拡大しました。なかでも被災地への訪問は、国民との一体感幻想を生み出しました。「国民に寄り添う天皇」像はより浸透し、天皇の人気や尊敬度は大きく上昇しました。「明治」から1945年敗戦までの、「上から強制される權威」としての天皇とは違って、国民から支持され、皇室との一体感幻想を作り出した天皇像は、裕仁（ひろひと）天皇以上に明仁天皇においてより強められました。本来、「日本国民の統合」を象徴するはずの「象徴」が、天皇の行為によって国民のほうが一つに統合される「能動的象徴機能」が強まり、国民主権は曖昧なものとなりつつあります。

戦争の加害者であるという歴史的反省を棚上げしたまま「犠牲者」を悼む行為を、明仁天皇が続けることによって、あたかも植民地支配の負の歴史が「解決」し、「一応の決着を見た」かのように国民に思い込ませる機能を果たしてきました。「護憲・民主主義の天皇」としてのイメージを醸し出し、国民に安心され、親しまれました。しかし現実には、日本の侵略加害の責任は、天皇を含め、国民の代表である政府によって、結局は明言されず、謝罪もなされていないまま、さらに30年を重ねたのです。明仁天皇の死者を悼み、悲劇を終わらせるかのような振る舞いにおいても、責任を負う当事者性は欠落していました。その結果、日本社会において戦争責任への追及や歴史認識は逆行してしまったと言ってよいのです。

1990年代には河野談話や村山談話にみられるように、侵略加害の歴史を認めるうねりがありながらも、結果的にそれへの反動は大きく、現在でも侵略加害の歴史に触れるることは“日本の名誉と誇りを傷つけること”として激しく反発が起こり、侵略されたアジアへの痛みを認めようとしない態度はむしろ深まっています。

また、明仁天皇が繰り返し語った「平和と繁栄の戦後」という定型句は、戦後も日米軍事同盟によって世界中の戦争に推進協力した戦後日本の実態見えなくさせる役割を果たしました。

そもそも、2016年8月の天皇メッセージは、高齢により「公的な天皇の務め」が困難になったため、「生前退位」を望むものでした。それは、一面では「第二の人間宣言」であるかのように聞こえ、それが広く国民に受け入れられました。しかしそれは、「国権に関する権能を有しない」はずの天皇が、国民の広い支持を背景としつつ、事実上国会に法改正を要求するという、憲法の規定を逸脱した「政治行為」でした。なぜなら、公共放送を通じてメッセージを伝えることそのものが「公人」としての行為であるからでして、それはもはや天皇が一切の法的規制を受けることのない超法規的な存在として振る舞うことができる、ということを意味しているのです。このことからしても重大な違憲行為と言わざるを得ません。

そして、2019年におこなわれた天皇「代替わり」に関する儀式は、まぎれもなく、すべて天孫降臨神話に基づく宗教的儀式でした。このような天皇の祭祀権を世襲する行為が、天皇の宗教的な権威を意義付けるものとしておこなわれ、しかもそれらが国事行為、公的行為としておこなわれた問題はきわめて重大なのです。⇒続く

